

まちのキラリびと



かつて、昆布が北前船で敦賀に運ばれ、そして関西に集められました。その過程で昆布加工の技術が敦賀に根付いたといわれています。

福井県昆布商工業協同組合

手すき昆布職人 別所 昭男さん

すき方によって昆布は表情を変える

こう教えてくれたのは、手すき昆布職人の別所昭男さん。「現代の名工」にも選ばれた昆布加工の匠の一人です。

手すき昆布は「おぼろ」と呼ばれ、昆布の表面を刃物ですきます。「アキタ」と呼ばれる器具で、刃物の切っ先を絶妙に曲げること、昆布が引っかかるようになり、その刃物を持った腕を膝で押し、呼吸を止めたまま一気にすくのが一連の流れです。

昆布の表面から順に「黒おぼろ」、「むきこみおぼろ」、「太白おぼろ」と呼ばれ、食感や味わいが変わってきます。また、厚みを変えることで、口触りがまるで違ってきます。通常のおぼろは、0・02mm〜0・05mm程の厚さですが、0・1mmまで厚くすくことで、見栄えもよく、煮込んでも形の残る逸品に。逆に、0・01mmまで薄くすくことで、雪のような口溶けが楽しめる。この技ができるのは、現在の技を編み出した別所さんただ一人です。

また、昆布の認知度を高めるため、イベントなどでの実演や学校での体験などの活動にも精力的に携わっています。

この伝統産業の門を叩く後継者は少ないですが、後進の育成にも力をいれているという別所さん。「今は自分しか行っていない技術を次の代にも繋いでいきたい」と笑顔で話してくれました。

敦賀の伝統文化を絶やさぬよう、匠は今日もシュツ、シュツという小気味良い音を立てながら、昆布をすいています。



- ▲ 加工場でおぼろ昆布をすく
- ▼ アキタで刃物の刃先を整える
- ▲ 旅行客が昆布すきを体験

まちの宝を発見！ つるが歴史遺産



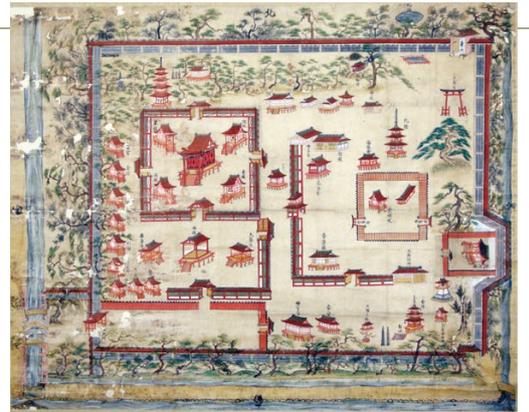
芭蕉参詣以前の古き神域の趣を伝えています

案内人 学芸員 高早 恵美

氣比神宮古図

基本情報

種別：敦賀市指定文化財
所蔵：氣比神宮



古の氣比の社の理想像

こちらは氣比神宮の境内図で、今から500年ほど前の室町時代に描かれました。こうした境内図は、天災や戦争などの被害を受け、社殿を復興するにあたって制作されたと考えられています。基本的な社殿の配置は現在に十分通じます。中央の本殿はひときわ大きく、理想的な復興を遂げた姿として描かれているのでしよう。この図の特徴の一つは、大鳥居が現在とは違う場所に描かれている点です。この図は上が北、右が東なので、大鳥居は境内の東北側にあったこととなります。総参祭の時、船神輿が東側から出入りするの、その名残と考えられます。

また境内の南(右下)の辺りに神宮寺の堂宇が描かれています。氣比神宮寺は715年に成立したとされる神仏習合の寺院です。平安時代には多くのお堂からなる大寺院でした。神宮寺は次第に力を失い荒廃したようですが、描かれた頃には何らかの形で復興が計られたのかもしれない。現在も敦賀市内には元神宮寺と伝える寺院が残されています。氣比社はこの後も何度か戦禍に見舞われますが、その度に復興を果たしました。由緒ある境内地は現在名勝「おくのほそ道の風景地」そして氣比神宮にのぼる月は「日本百名月」にも選ばれています。

広報担当者のつがやき

最近、高校生を取材することが増えています。まちづくりをはじめさまざまな活動に、学校を挙げて、また自らの意思で積極的に取り組んでいるように感じます。20年前の自分を振り返ると、あまり、まちのことを意識していなかったので、次世代を担う若者たちがとてもたくましく、そして心強く思います。(K)

取材をきっかけに初めてアカカンパを食べました。甘酢漬けにしたらおいしいと教えてもらったのでさっそく実践。私はお酒が好きで普段からよく飲むのですが、おつまみとして最高でした。ちなみに広報紙と一緒に作っているK先輩は、取材をきっかけに昆布にハマったらしく職場で爆食いしています。(M)